



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	LD児における漢字単語の読み困難とその支援に関する研究：通常学級児童の漢字単語読み困難との関連(審査結果の要旨)
Author(s)	熊澤綾
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/147690">http://hdl.handle.net/2309/147690</a>
Publisher	
Rights	

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

学習障害(Learning Disabilities, LD)は、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す。英語圏のLDの学習支援については、読み書き障害の対応を中心に多くの知見が蓄積されてきた。しかし、日本語圏のLDの学習支援については、知見の蓄積が十分でない。本論文では、漢字単語の読み困難を、漢字単語の心像性(視覚的イメージ性)との関連で検討した。その際に、ひらがな文の読み困難のある者を特異的読字障害とした。その結果、特異的読字障害の中でも、言語性記憶の弱い児童では、漢字単語の心像性の低下に伴い、漢字単語の読み困難が生じることを明らかにした。本論文は、日本語圏のLDの漢字読み障害の特徴を明らかにした点で、教育上の意義が大きい。また漢字の読み困難の背景に基づきその支援方法を検討した点で独創性が高い。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文では、発達心理学や特別支援教育学の領域における代表的な研究方法を用いている。特に、医学や疫学においてリスク要因の解析に用いられる多重ロジスティック回帰分析を、漢字読み困難の背景要因の解析に適応した。この分析は、失語症の漢字読み困難の分析に用いられた方法であるが、LD児の漢字読み困難の分析に適用し、妥当な結果を得た。

以上のことから、本論文の方法は研究目的に合致し、当該学問分野において十分に検証された、妥当な方法あると説明できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文では、失語症の事例の先行研究から、漢字単語の心像性効果に基づく検討の必要性を指摘し、先行研究を考慮してデータの収集・分析を行った。従って、データの収集と分析は適切である。個別調査に関しては、対象児と保護者より研究の実施と結果の発表に関して文書で承諾を得た。集団調査に関しては、教育委員会と小学校長の承諾を得た。教育委員会と小学校長は、授業改善の取り組みの一つとして調査を実施した。調査と研究の趣旨を文書で保護者に伝え、小学校を通して研究協力と結果発表の同意を得た。調査結果については、個別の情報として小学校に報告を行い、あわせて、低成績者について指導や支援方法を学校に提供した。データ分析も適切に行われた。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文では、漢字単語の読み困難を、漢字単語の心像性(視覚的イメージ性)との関連で検討した。その際に、LD児の中で、ひらがな文の読み困難のある者を特異的読字障害とした。その結果、高心像性単語より低心像性単語の成績が低い児童が多く、特に読み障害児に多く認められた。また、LD児を対象として単語の心像性を高める指導を行った結果、漢字単語の読みに心像性の寄与が高かった事例では、イラストによる学習効果を認めた。これに基づき、LD児に対す

る漢字単語の読み学習の支援方法について考察を行った。従って、本論文の考察と結論は、調査研究と学習支援研究に基づくものであり、妥当であることを指摘できる。また、その成果は学術雑誌に掲載され、学術的な水準に達していることを指摘できる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文で示された LD 児の漢字単語の読み困難の特徴とそれに基づく支援方法の提案は、通常学級の調査と支援において確認された。したがって、本論文の知見は、LD 児の研究と通常学級に関する知見に基づくものであり、通常学級における学習支援を行う上で、貴重な知見である。この点については、学会において高く評価され、2013 年度の日本特殊教育学会奨励研究賞を受賞した。これより、教育臨床上、有意義な研究であることを指摘できる。

また、本論文で示された漢字単語の読み困難に関する知見は、LD 児に対する治療的指導ならびに、通常学級での学習支援の基礎的知見となるものである。これより、本論文は、取得学位にふさわしい意義を有し、特別支援教育の展開に成果をもたらすものであることを指摘できる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員が一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与にふさわしいとの評価を行った。